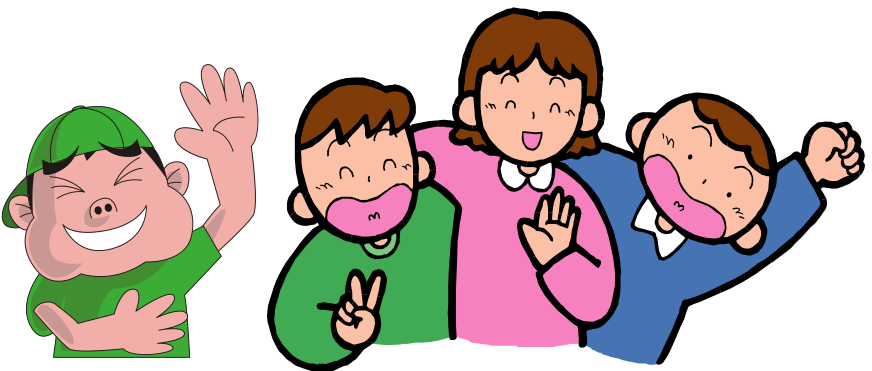


## ぼくは、知っている陽一が……

ぼくらは、今日卒業する。  
そして、違う中学校に行く友だちもいるので、バラバラになる。でも、ぼくらは、みんな信じ合える最高の友だちだ。そして、大人になっても絶対に変わらない自信がみんなにある。



①  
4年生の秋の出来事だ。そのころの陽一はじっとしていることができなくて、いつも先生に叱られていた。孝幸のことをたたいたり、後ろから押したり、いじめてばかり。他にも、女の子の髪の毛をひっぱったりは当たり前で、気に入らないと、だれの悪口でも言っていた。だから、みんなに嫌われていた。ぼくは、近くに行くことさえいやだった。

そんな陽一が、学校を休んだ。休みは3日続いた。気になったので先生に聞いてみた。

「陽一君は、お家の都合でお休みです。」という答えだけだった。

「陽一どうしたのかな。」

「いいよ、あんなやつ。」

「あいつがいないと、静かでいいよ。」「人の悪口を聞くのはうんざりだ。」

そんな話しが、教室のあちこちで聞こえた。

4日目の朝、陽一は何事もなかったように、いつも通り教室にやってきた。ぼくは、陽一に

「陽一、どうかしたのか。3日も休んで。」と声をかけた。

陽一は、「別に」「おまえにかんげいないだろう」といって相手にしてくれない。

心配したのに……。……。……。なんか腹が立った。



②  
次の日、また陽一が休んだ。  
すると先生から

「急ですが、陽一君はお家の人の都合で転校することになりました。」といわれた。そして、「明日の夕方、学校にある道具を取りに来るのが最後になります。残ってもだいじょうぶの人は、残って陽一君にお別れをしましょう。」という話しがあった。

みんな、びっくりしたようだった。休み時間になって「明日どうする?」とみんなまで話し始めた。

③



陽一がいなくなった。

陽一は、よくぼくにいじわるをした。ぼくがいやがるともつといじわるをした。みんながきらっていたのは、当たり前だ。

でも、陽一はマラソン大会でぼくが一番最後になると、一番大きな声で応援してくれた。ぼくが、女子にからかわれると、かばってくれた。クラスのレクリエーションでは一番明るくて、元気だった。サッカーの試合でミスしても「気にすんな」っていつてくれた。陽一だけだ。

陽一は、みんなが言うようにいじわるだ。でも、でも、でも、ぼくは、知っている。陽一は、みんなのことが大好きだ。いじわるだけど、優しいところもいっぱいある。みんなは、陽一をよくないところだけ見て文句ばかり。陽一がいなくても、ぼくは、さびしい。大事などもだち、もつともつ……と。

④

ぼくは、この作文を聞いたとき、たまらなく陽一に会いたくなった。そして、ぼくだけじゃなかった。

「先生、陽一に手紙を書いてもいいですか。」

「いいですが、他の人はどうしますか。」クラス全員が「書きたい。」っていった。

ぼくたちは、孝幸のおかげで気がついた。友だちってどんなものか。ぼくだけじゃない。クラスみんなが気がついた。涙ぐんでいる友だちもいた。

本当は、ぼくも涙がこぼれそうだった。今、陽一に会えるならきつと、今まで以上の友だちになれる。

ぼくにも、クラスの友だちにも自信がある。

こんなことがあったあと、今までよりずっと、ずっと仲よくなった気がする。みんなが。

プロジェクターを使って提示する。

